

2. 北区に根付く 地域文化



新琴似歌舞伎中学生公開講座(平成26年9月4日、プラザ新琴似)

2.北区に根付く地域文化

あさぶ亜麻保存会

～子どもたちに亜麻の歴史をつなぐ～

あさぶ亜麻保存会 会長 みやざき 宮崎 まさはる 正晴

あさぶ亜麻保存会の活動は、今年で5年目になります。

麻生に住んでいる方や亜麻に興味がある方、また、麻生町内会や麻生商店街振興組合、NPO、企業や商店の方も協賛してくださって、私たちの活動を支えてくれています。また、北区からも支援をいただき、平成24年から3年間、地域振興の助成金をいただいたり、行事に呼んでいただき、亜麻そば乾麺やコーヒーの販売を行い活動費に充てています。

“あなたの親切に感謝します”という亜麻の花ことばそのままに、みなさんの麻生への想いと応援に感謝しながら、活動しています。

【亜麻の花のひろがり ～多年草と一年草】

亜麻には、観賞用の多年草と茎が繊維になる一年草（一年草には、茎が繊維になるものと種を食べられる品種がある）があります。多年草は花が大きく、花の咲く時期が長いため、たくさんの方に長く楽しんでいただけます。一年草は花が小さく、午前中しか咲きませんが、茎が長くしなやかで、かれんな薄むらさきの花が風に揺れる様子は、とてもとてもきれいです。

毎年、和光小学校をお借りし多年草の苗を育て、町内の方に協力をお願いし、街路ますやマンションなどの花壇に花を咲かせています。5月には、麻生老人クラブの方や和光小学校の6年生とともに、小学校前の街路ますに、亜麻の多年草を植えています。街路ますの亜麻は、五叉路から、34条駅近くまで、かれんな花を咲かせて地域の皆さんに楽しんでいただいています。

また、一年草は、麻生商店街振興組合の駐車場や三代交流ひろば あまんと café 亜麻人前、麻生キッチンあん前、覚王寺の前に亜麻保存会のメンバーが北区の地域振興課と商店街から協力をいただき、プランターに種をまいています。平成26年、麻生

商店街駐車場の看板を新しくした際に、今までプランターを置いていたところを花壇にしてください、ちょっとした亜麻ロードになって、一年草が見られる名所?になりました。一年草は、麻生緑地と和光小学校花壇にもあり、“あおやぎ”という茎が1.5mにもなる品種が植えられています。



亜麻ロードの写真



【小学校での授業】

平成26年5月22日、和光小学校4年生の総合の時間で、亜麻についてお話をする機会をいただきました。亜麻の茎が繊維になること、麻生に繊維工場があったこと、“麻生”というまちの名まえの由来が亜麻からきていること、亜麻の一年草の種は、熱を加えると食べられてとても栄養があることなど、写真を見たり、実際に亜麻の繊維を触ってもらったりしながら、お話をしました。皆、真剣に話を聴いてくれ、亜麻の花には、他にどんな色があるのかななどの質問も出て、関心を持ってくれたのがうれしかったです。（亜麻の花には、ベニアカアマといって観賞用の赤い花もあるのです!）授業のあと、麻生まちづくりセンターで、「亜麻の人だ!」と小学生に声をかけられたのも、うれしできごとでした。



【中学校での授業】

9月4日には、新琴似中学校1年生のみなさんに総合の時間に、「郷土を学ぶ学習」と題して、麻生の亜麻工場の歴史や繊維の話をし、亜麻の糸を使ってコースターづくりをしました。コースターづくりの講師は、昔、麻生で糸の店「レフィル」を営んでいた畠山祐子さんをお願いしました。担当の先生と20名の生徒さんが、話を聴いて下さり、楽しんでコースターを作っていました。地域の亜麻に関心のある方も参加され、ちょっとした交流も生まれました。20名の生徒さんの亜麻のコースター作りと亜麻のことをまとめた資料は、それぞれの個性があふれ、亜麻についてとてもよく学習していて、感心し、感動しました。自分が住んでいる麻生にこんな歴史があることにびっくりしたという感想もあり、これからも、こんな授業を続けて、子どもたちに麻生や亜麻のことを伝えていきたいと強く思いました。今回まとめてくださった20名の生徒さんの感想文や資料は、あさぶ亜麻保存会の宝物です。



【亜麻のいとでつくろう】

地域の方にも亜麻を知ってもらおうと、「亜麻のいとでつくろう」という講座を開催しています。中学校で講師をつとめていただいた畠山さんに毎年お願いして、亜麻保存会のメンバーや地域の方で、亜麻の糸を使った織物などを作っています。平成26年は、亜麻に関心のある方から連絡をいただき、亜麻の茎から繊維を採ってみたいとのことで、当別の亜麻公社に行き、浸水させた亜麻の茎を砕茎し、ムーランという



扇風機のような機械に通し、殻をとばして、繊維を取り出す作業をしました。

今後は、麻生緑地にあるあおやぎの亜麻から繊維にする作業を地域の方や子どもたちと一緒にできればと思っています。

【亜麻の種】

一年草の品種には、茎が繊維になるものと種を採るものがあります。今、種の栄養が注目されていて、亜麻の種をサプリメントにしたり、料理に使ったり、オイルにしたり活用されています。青魚やマグロのDHAなどよりも、豊富にオメガ3系脂肪酸の一種「 α リノレン酸」を含んでいるのが亜麻仁油だそうです。麻生商店街振興組合では、亜麻の実をそばに練りこんだ亜麻そば乾麺をつくり、販売しています。亜麻保存会では、この乾麺を時々、イベントなどに持ち込み、麻生の亜麻の歴史を伝えながら、販売しています。あさぶ商店街の空き店舗事業で行っている「麻生キッチンリあん」やあさぶ商店街事務所と同じビルのNPO法人子育て支援ワーカーズプチャトマトが運営する「café 亜麻人」でも販売しています。麻生でしか買えない貴重なおそばです。



【“たね”からひろがるまちづくり】

昭和58年、ふらっくす倶楽部としてはじまった亜麻の魅力伝える活動が、今、行政やNPO、企業と地域の様々な方たちとともに少しずつ広がっています。亜麻のたねは、地域を大切にする気持ち、地域の人たちが助け合い、自分たちの地域は、自分たちの手でつくっていくという基本的な力を取り戻してくれているような気がします。今後もあたたかいつながりが生まれるよう、麻生から、“たね”を育て、広める活動をしていきたいと思っています。

あさぶ亜麻保存会では会員を募集しています。
年会費は個人が一口1,000円、団体が一口2,000円以上となっています。
関心のある方は下記までお問い合わせください。

○お問い合わせ

あさぶ亜麻保存会

TEL.011-728-3700 (café 亜麻人内)

さくらで結ぶ街、人、絆

新川さくら並木連合町内会 会長 おおにし 大西 たけひこ 建彦

新川地区は、東西 7.5km に及ぶ細長く、何の変哲もない平凡な住宅地です。

町の形態は、連合町内会を結成して四十数年となりますが、西に向かうにしたがって、新興住宅地として発展いたしております。若年層が多く、それに伴い住民意識にも温度差を感じることもございます。

そんな環境下で、地域力、絆を育む施策を模索してまいりました。新川連町大運動会の歴史は長く、多くの参加者を集める自慢のイベントでし

たが、役員の高齢化、財政などの事情により平成 23 年をもって、中止の止む無きに至りました。

存続を望む声が多いものの、事情をご理解いただき、早速代替案の検討に入りました。

「新川地区には、立派なさくら並木がある。ここをシンボルロードとして、全てを発信することができないか」、その可能性について、検討してまいりました。

先人の弛まぬ努力によりまして、平成 12 年に 7.5km、755 本のさくら並木が完成しましてから昨年 15 年を迎えました。我々が日本一のさくら並木と言いますのは、この全ての木が、住民の善意により、延べ 1300 人の奉仕活動によって植樹され、苗木、その他工事に係る費用も住民の善意によるものであることを誇りとして、日本一のさくら並木と称しております。

創設された先人は、その理念を、特色のない街並みを住民が誇れる街に変えるとともに、郷土愛、絆が育まれることを念じ、「さくら並木を 21 世紀への壮大な贈り物とする」と記されております。



新川さくら並木



4月のさくら並木クリーン作戦



5月の新川さくら並木フェスティバル音楽祭



6月の新川さくら並木ウォーキング

継承する私たちは、四季を通して、ここから発信できる事業を考え、より建設的なまちづくりを模索の結果、実施事業に膨らみを持たせる形にリニューアルし、4月にはさくら並木クリーン作戦、5月はさくら並木音楽祭、6月はさくら並木ウォーキング（平成26年は550名の参加者）、来年度から新規事業として、冬期、子どもたちを対象にさくら並木スノーフェスタ（仮称）を行う予定です。このように通年事業の実施によりまして、衆目を集め、多くの思い出を共有し、郷土としての姿を認識することによって、街造りが出来ればと考えております。そこで、平成26年度より、新川連合町内会を「新川さくら並木連合町内会」と改称致し、広く皆様方の認知をいただくことと共に、住民意識と地域力、絆の醸成を確かなものとしていければと考えております。

なお、桜並木の維持管理には、多くの費用が掛かります。このため、連町として収益事業を始めました。障害者を雇用する菓子店と契約し、お菓子の販売をいたしております。ご利用いただければ幸いです。

一方、連町支援の中で進めております高齢化に伴う事業ですが、札幌市社会福祉協議会では、新川地区を初めての試みとしてモデル地区に指定し、シルバートータルサポート事業を平成26年度より北区社協と並行するかたちでスタート致しました。

既に新川地区では、民児協、新川社協、単町社会福祉部の三者が一体となって、対象者の情報共有と同行訪問、見守りなど進めておりましたが、一歩踏み込んだ内容で3ヶ年計画として実施することになりました。

対象者のニーズを的確に判断し、関係機関と連携しながら、できるだけの対応を施すもので、奥深い事業となります。多くの方の協力が求められます。各单位町内会では、そのためのボランティア、協力員などのスタッフの募集に注力いたしております。

一方、天変地異が常態化している昨今ですが、平成26年は北区役所のご指導のもと、新川中央小学校の避難訓練と同時進行の形で、避難訓練・避難所体験訓練が行われました。災害の少ない地域ですが、災害を対岸視しがちな住民の意識改革には十分に役立つものでした。なお、本年1月22日に、札幌市防災表彰を上田市長より受賞致しました。

今後いろいろな訓練を重ね、住民が災害発生時に備えた一助になるよう、努めてまいります。

防犯防災部では青色パトロール、振り込め詐欺に力点を置き、また、交通安全部では啓発活動に積極的に取り組み、年々動員数が上がっており、交通事故に対する抑止力となっています。



北区防災訓練の様子

○お問い合わせ

新川まちづくりセンター
TEL.011-762-2604

篠路歌舞伎の歴史と現在

篠路歌舞伎保存会 会長 おおたか ひでお 大高 英男

【篠路歌舞伎について】

明治35年4月、篠路村^{れつれっぶ}烈々布移住者の中の青年たちによって「烈々布素人芝居」が烈々布神社に奉納されました。これが昭和40年以降「篠路歌舞伎」と呼ばれるようになった芝居の初演です。

北海道の開拓が始まり、本格的な篠路村への移住が始まったのは明治中期のことでした。入植した移民による開拓は厳しい自然災害との闘いであり、大洪水や冷害などが与えた被害は移民たちに厳しい生活を強いました。明治29年と31年の石狩川の大洪水による被害は甚大で、多くの離村者を出しました。離村者の増加による人口減少は部落の存亡を左右する切迫した事情にありました。

こうした生活状況を背景に、青年たちはお互いの力を出し合う場を求め、また、心のよりどころを求めようになりました。

青年たちは明治31年8月に青年会組織「若連中」を組織しました。この青年たちが中心となって、同年9月に「烈々布神社」を創建しました。そして、青年たちの中から神社の祭典の余興として「芝居」を奉納しようという声があがりました。

その当時、若連中の青年たちに芝居を指導していたのが「大沼三四郎」です。大沼は、この地で本格的な歌舞伎を公演したいという情熱を持って臨んでいました。

大沼三四郎と若連中の青年たちの芝居にかかる情熱によって、中沼、丘珠村、元村、石狩からも観衆が集まり、公演はますます本格化するようになりました。

素人芝居は大正時代に最盛期を迎え、十軒や丘珠の青年達も座員として参加するようになり、一時座員は50人にも増えました。

祭典奉納と地域の人々の娯楽・慰安行事として支持されていた「素人芝居」も、昭和の時代を迎えた頃から衰退してきました。

座員である青年たちが出征したり、札沼線開通などで娯楽の多い札幌中心部への人の流れがあったことなどです。

当時、篠路地区の集いの場として建築が進んで



花岡引退興行「侠客御所五郎蔵」の一場面



花岡引退興行「神靈矢口の渡」の一場面

いた「篠路共楽館」の落成を記念して、この“こけら落し”に「花岡義信一座」が公演することになりました（花岡義信は大沼三四郎の芸名）。

昭和9年11月22日、23日の2日間、「共楽館落成記念、札沼線開通奉祝記念、花岡義信一座引退興行」は華やかに、盛大に公演されました。2日間ともに会場に入りきれないほど大入り満員で大盛況のうちに終了しました。

こうして烈々布素人芝居は、33年間の歴史を残して終焉しました。

昭和60年10月、篠路コミュニティセンターが開館しました。この開館記念祝賀会に地域の有志が「白浪五人男」を公演し、大喝采をうけました。

この公演は「花岡義信一座引退興行」から数えて50年ぶりの復活となりました。この公演がきっかけとなって昭和61年12月に「篠路歌舞伎保存会」が発足しました。

大沼三四郎が、彼の情熱を傾けて築いた篠路歌舞伎は、昭和61年に篠路中央保育園の園児に引き継がれました。以来、「篠路子ども歌舞伎」として道内で多くの公演をしてきております。毎年10月に開催されている“篠路文化祭”の公演では、来場者から大きな声援と励ましをいただいております。

以来、子ども歌舞伎は平成27年1月の公演まで、実に篠路地域を拠点として28年間「篠路歌舞伎」の保存、伝承に貢献しています。

保存会は、昭和61年12月の結成以来、今年で



29年目を迎えました。

保存会の目的は札幌市民が誇れる貴重な伝統芸能としての「篠路歌舞伎」を保存伝承し、この活動を推進、支援することです。

具体的に記すと、

- ①篠路歌舞伎の伝承意義と、保存会の存在をPRし、市民の理解と支援を得る。
- ②篠路中央保育園の「子ども歌舞伎」の支援。
- ③協賛者を増やし、その理解と支援を求める。
- ④各種団体が主催する学習講座などにおいて講演できるように働きかける。26年は4ヶ所で講演を実施しました。



篠路シルバー水曜大学での講演活動

篠路歌舞伎保存会では会員を募集しています。
保存会は、本会の目的(篠路歌舞伎の保存伝承)に賛同する者をもって構成しています。
随時受付けていますので、次の所へご連絡下さい。

○お問い合わせ

会長(大高) 宅

TEL.011-771-1166

※年会費は1,000円です。



篠路文化祭での「篠路子ども歌舞伎」公演(白浪五人男「稲瀬川勢揃いの場」)

新琴似歌舞伎傳承会の取り組み

新琴似歌舞伎傳承会 事務局長 みやざき 宮崎 よしはる 義晴

【復活公演までの概要】

明治20年5月、主に九州出身者が新琴似へ屯田兵として入植して以来、5年超の歳月が経ち、開拓も進みやや落ち着きが見られてきましたが、まだまだ日々の生活に余裕が乏しいそんな中、一人の青年、田中松次郎さんを中心に地域の若者が集い、日々の厳しい労働から精神的な開放や発散と娯楽を求めて発祥したのが新琴似農村歌舞伎でありました。

当時、村人が集結する会場が若松館であり、癒しと娯楽、情報の館でもありました。

しかし、文明開化の影響を受け、その一つである映画が登場すると、村人が私財を費やしつつ守り続け「農村文化の走りよと…（島田無響先生の脚本より一部抜粋）」ともうたわれておりました新琴似農村歌舞伎は、大正初期、新しい文明に憧れ流れてゆくなか惜しまれつつ終焉をむかえる運びとなりました。

それから約70余年が経った平成5年7月、眠り続けている新琴似農村歌舞伎を再び眠りから目覚めさせるべく、新琴似歌舞伎傳承会を設立しました。会の目的も新琴似農村歌舞伎の保存・伝承と掲げ、平成8年3月、80余年ぶりに待望の復活公演を果たしました。

北区行政による財政面や資料提供などのご支援、地域住民のご理解とご協力など多くの方々による多大な尽力が結集したおかげです。復活公演の演題は、歌舞伎演目で知られている「青砥稿花紅彩画＝あおとぞうしはなのにしきえ通称…しらなみごにんとこ白浪五人男（浜松屋といなせがわせいぞろ稲瀬川勢揃いの場、各一幕一場）」に決まりました。出演者は全員素人、当初は稽古も間々ならず、「果たして復活公演が果たせるであろうか」と、悩みごとも多くありましたが、当日の昼夜2回の公演は会場がともに満席近く、演技もそれぞれ見事（自己満足もあり…）な出来栄で終わることが出来ました。公演終了

後に行われた反省会は、大変盛り上がったことが今、思い出されてきます。この雰囲気が続くことにより会の目的は途絶えることがないことを確認した次第です。

【近年の活動内容】

平成25年ノースウイング第20号で紹介させていただきましたように、地域の屯田兵中隊本部保存会（兵舎は札幌市有形文化財指定）と共に、地元中学生（1年生）を対象に歌舞伎講座を毎年開催しています。地元の「歴史的あゆみ」や「そのなかで歌舞伎が果たした役割」などを知り郷土愛を深めるとともに、歌舞伎を自ら演じその醍醐味や造詣、日本古来の伝統文化・芸能に接し関心を持ち続けてもらうことを願い、平成26年度で9回目を迎えました。ここまで続けてこられたのも、学校側の関心度の高さ、生徒の積極性や保護者によるご理解とご協力の結果です。



平成26年9月4日の第9回歌舞伎講座では、演目を考慮し参加生を10名と考えておりましたが、過去になく26名と応募生が多く、その中から10名を基準に選抜してゆくなかで、応募生的心情を思うと胸が張り裂ける思いでした。参加したくても出来なかった生徒、また参加ができて役柄について自分の思いと異なった生徒、クラブ活動や塾との兼ね合いで思うように稽古へ参加することが出来なく苦慮した生徒、また当初、下駄履き着物姿（浴衣）の稽古で自己発揮が思うように出来なかった生徒など、試行錯誤の連続でありました。しかし、生徒たちはそれらを乗り越え、当日は花道で堂々と見えを切る見事な演技力を披露し、また裏方としても立派に役割を果たし、その姿には感服させられた幸いです。

今回、生徒たち自身が演技や裏方の役割をそれぞれ担当したことはかつてない現象であり、私たちが願っていた伝承活動の成果がようやく、一步一步、着実に実ってきた証しであることと喜び、次年度へ弾みができました。

今回、演技や裏方で活躍した10名の参加生を囲んだ反省会では、参加した喜びとして「今まで体験したことのない事柄を知れた」「身についたことが出来た」「出来れば次年度も舞台上に立ってみたい」など、新しい自分を見出す言葉が次々と聞かされ、私たちはこの貴重な経験がこれからの生活や活動の糧になりますよう、期待しております。

また、出演された生徒の保護者からは、歌舞伎を通し、「今日、こんなことが、こんな稽古であった」など、今まで親子の会話も少なく悩んでいたこと



新琴似歌舞伎中学生公開講座

がこの機会を通し、接する回数や会話も増えてきたとの喜ぶ声を聞くことができ、親子の絆が深まってゆくことへ僅かでも役立つ事となり、思わず感動したところです。

今までにない多くの喜ぶ声、感動を与えてくれたことは、この講座の意義、継続の大切さと成果があがった1年でした。

平成26年は、伝承会員にも数年ぶりに舞台上で演ずる感触を味わう機会に恵まれた1年でもありました。新琴似文化振興会20周年記念芸能のつどい(11月7日)への参加です。

この会は、地域の皆さんが日頃より同じ志向を抱く仲間と集い、舞踏をはじめコーラス、詩吟など多くの文化・芸能部会が、日頃の成果を発表する会です。伝承会も芸能部会へ入会しており、今回は周年記念行事でした。

伝承会の公演は、会長の凛々しい口上で幕が上がり、「白浪五人男(稲瀬川勢揃いの場、一幕一場)」を演じ、日頃培ってきた活動の一端を披露させていただきました。

新琴似まちづくりセンター長には特別出演を願い、伝承会の公演をより一層盛り上げていただきました。会場からはその名演技と普段見ることのできない一面に、盛大な拍手が送られ、伝承会としても素晴らしい会員が増え、この上ない喜びを味わうことができました。

会員も久しぶりの公演ゆえ、中学生への伝承活動と異なり、経験や舞台慣れしている積もりで臨んだところ、稽古回数も思うように取れず、稽古不足が響き、当日は台詞を一瞬忘れてたり、取り違えたり、思わぬ出来事へ慌てたり、苦笑したり、



新琴似歌舞伎中学生公開講座

2. 北区に根付く地域文化



会長による口上

冷や汗をかくなど、今まで体験することのなかった事が次々に起こり、これも中学生たちの手本となるよう意識過剰の結果と勝手に解釈し、でも無事責任を果たすことができ安堵いたしたところです。出来栄えに賞を頂けるとしたなら、敢闘賞いや健忘賞または弁解賞…でしょう。



公演後の記念撮影

【今後の課題】

悩みはどの組織、会社でもあるように、私たちの伝承会にも多々あります。

一つは、会員の高年齢による弱体化。その補てんへ新規会員の勧誘と増員を図っております。

盛んにいろいろな機会を捉え呼びかけるなど、勧誘や増員活動を展開実施いたしておりますが、今ひとつ成果が表れず悩んでおります。期待は、今まで歌舞伎を経験してきた若き中学生、卒業生、歌舞伎に関心のある方です。ぜひ会員になっていただくことを期待しております。

一つは、安定した保存、継承活動を続けてゆくためには多額の財源が必要とされております。伝承会は、その安定した収入を得る特別な事業活動

を実施いたしておりません。会員の活動は全て熱意のボランティアと僅かな年会費が財源であります。ゆえに活動も自ずと抑制せざるに至ります。幸い各企業にいろいろな規約を定め、地域活動の促進や活性化、文化の向上などを図る助成金制度があり、少ない該当率に望みを託した申請書の作成へ微力ながら尽くしているところです。

また、歌舞伎講座がマンネリ化してきていることです。これは是非、早急に改善策の検討が必要です。保存と後世への伝承を絶やさないことを最重視し、古きよき事柄を保ち、いかに現代的内容に転換すべきかを考えています。

例えば、関係者の助言を受け、今までの講座で演じてきた脚本の良い箇所は継承し時には内容を書き換える工夫などの検討、観客や参加する生徒たちにも更なる魅力が感じられ分かりやすい内容へ、衣装も現代風の服装へ、また新しい演目を模索するなど、プロの歌舞伎役者ではないだけに全体を見直し、誰からも好かれる親しまれる演目や脚本の選択が問われてきた感じがいたします。

果たして良策か否か判りませんが積極策の取り入れは、今後の伝承会組織が歩む道、在り方、発展にも大きく影響を及ぼす結果になるかと思えます。そのためにも会員の活動と更なる関心・研鑽が大切なことは述べるまでもありません。

平成27年は干支が羊です。新琴似歌舞伎伝承会を設立し、復活初公演を果たした平成8年3月から19年目を迎える意義ある年度です。過去の反省と全会員の英知を結集し、諸々の難題をわずかでも解消し未来が拓かれる年になるよう、力を合わせてまいります。

どうか、課題解決へ良き助言を願います。

新琴似歌舞伎伝承会では新規会員を募集しています。年会費は4,000円です。詳しくは下記までお問い合わせください。

○お問い合わせ

新琴似歌舞伎伝承会

TEL.011-764-8804 (プラザ新琴似内)

コラム③ 北区歴史と文化の八十八選

札幌で最も早い時期に開拓の鋤が入った北区には、歴史的にも大切な建物や文化遺産が数多く残されています。北区役所では、その中から88カ所の名所を選び、案内板やガイドマップを作成して、これらの文化遺産を多くの人に知ってもらうために「北区歴史と文化の八十八選」事業を行っています。

八十八選の案内板には、それぞれの由来や歴史的経過などがわかりやすく説明してあります。注意してよく見ると、1つずつキーワードが書かれてあり、それらを順番につなぎ合わせると、5つのコースごとに1つの文章になります。

※一部、形の違う案内板がありますので注意してください。

キーワードをすべて正しく見つけて、5つの文章を完成させた方には、すてきな賞品を用意しています。北区役所地域振興課か、各まちづくりセンターまでお越しください。

「北区歴史と文化の八十八選」の詳細は、北区役所などで配布している「北区歴史と文化の八十八選コースガイド」に掲載しています。地域についての学習や健康づくりに、是非お役立てください。

◆八十八選の一部をご紹介◆



I 文学と学問の道

(11) ウィリアム・S・クラーク像
札幌初代農学校教頭として来日し、学生に大きな影響を与えた。「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の言葉が有名である。



II 水辺と開墾の道

(30) 近藤牧場
牧場内に木でできた珍しいサイロを持ち、札幌の周辺部にかつてあった牧場の風景を今も残している。



II 水辺と開墾の道

(44) 帝国製麻琴似製線工場跡
同工場は明治23年に操業を開始、昭和32年まで繊維の生産を行っていた。工場長宅のアカマツが、今も道路の中央に残っている。



III 森と歴史の道

(61) 創成川通りのポプラ並木
田畑を牛や馬に荒らされないために、大正4年に植えられた。北大ポプラ並木に劣らぬ見事な並木に成長した。



IV 農村文化発祥の道

(78) 龍雲寺のイチョウ
篠路開拓者の心のよりどころだったこの寺に、新しい土地の開拓の記念として植えられたと伝えられている。



V 藍の道

(86) トンネウス沼
沼にはカラカネイトトンボなどの珍しいトンボが生息している。このため「あいの里」地区の造成時にこの沼を残した。

※それぞれについている数字は八十八選の通し番号です。

【お問い合わせ】 北区市民部地域振興課まちづくり調整担当係 757-2407

2. 北区に根付く地域文化

コラム④ 北区の伝統文化

先ほどのページで紹介した「北区歴史と文化の八十八選」の他にも、北区では農村歌舞伎や獅子舞などの伝統文化が地域に根付いています。このページではそんな北区の伝統文化をちょっとだけ紹介させていただきます。

【農村歌舞伎】

明治30年頃、新琴似地区では田中松次郎が、篠路地区では花岡義信が中心となり、農村の娯楽として素人歌舞伎が盛んに演じられていました。いずれも大正から昭和にかけて一度途絶えましたが、地域住民の熱意により復活しています。



篠路歌舞伎（花岡義信）

【藍 染】

明治15年、徳島県出身の滝本五郎が篠路村で興産社を興し、故郷の特産品「藍」の栽培や藍染の原料である「すくも」の生産を明治末年まで盛んに行っていました。現在はその伝統を受け、地域団体の手で藍染が行われています。



藍染体験

【篠路獅子舞】

富山県から篠路烈々布に入植した若者らが、明治34年にふるさとを懐かしんで獅子舞を演じたのがきっかけとされています。優雅で女性的な舞いが特徴で、現在も伝統を絶やすことなく篠路神社の秋祭りに奉納されています。



篠路獅子舞奉納

【亜 麻】

明治23年から昭和32年までの間、現在の麻生地区では亜麻の製線工場があり、その歴史は「麻生」の地名にも残っています。現在も麻生では、亜麻の花の栽培や「亜麻そば」の商品化など、亜麻によるまちづくりが進められています。



かつて麻生地区にあった製線工場

【お問い合わせ】 北区市民部地域振興課まちづくり調整担当係 757-2407